

# 槐

かい

岡井省二創刊

平成22年10月号

平成二十二年十月一日発行 第二十卷第十号 通巻第三三三号（毎月一回一日発行）  
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



土用波

高橋将夫

魂を包むごとくに袋掛

風鈴は何かを思ひ出して鳴る

水色の風鈴水の音がする

岩に立つ女の影の灼けてをる

姫路城にて炎帝に降参す  
白光の仏炎苞に夏の雨  
母の針箱亡き父の夏帽子  
かき氷昭和の溶けてゆく如し  
瓜と爪間違ふほどの炎暑かな  
甚平を着て夢の世を言うてをる  
置き去るもさらつてゆくも土用波

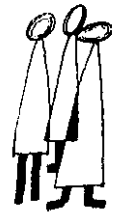
# 槐安集

水野恒彦

蟬時雨誰かうしろに来て祈る  
木に草に白花四萬六千日  
百年は戀に足らざり冷し葛  
白地着て瑞々しきは夜の雲  
死者よりも生者が遠し踊の輪

延広禎一

道をしへ飛んで仁王の大草鞋  
こいさんの餌付けしてをる熱帯魚  
みんな乗り愛車の茅の輪くぐりかな  
七ツ星の天道虫をる絵心経  
天地宝楽一氣に開く牡丹鱧



加藤みき

夏座敷写真の母になりみたり  
青柚子の香りの中の夕餉かな  
朝ぐもり白色レグホンのとさか  
水旨し宮裏にある涼しさよ  
マニキュアの手足夜光虫の中へ

石脇みはる

イタセンパラの生きるわんどの大暑かな  
大蜘蛛や葬に参列してゐたる  
集合は早朝七時凌晨花  
泥の田の墓顔をあげ動きけり  
天道虫子の手のひらの大宇宙

中島陽華

扇の賀酒は豊後の土土かぶりかぶり  
土に埋めて発酵さす  
夕顔ややけどしさうな粥の夜  
百面相すはぶりついて李かな  
飛魚とぶや虹の松原波静か  
朱墨乾きてあすか野の優曇華よ

栗栖恵通子

万緑や乗り継ぐサドル生ぬくし  
独房のガラスの中の鬪魚かな  
黒南風や普陀落とほき舟ばかり  
前掛けにらつきよ仰山もろてきし  
紹に染めて『雪持芭蕉』しなりをる

竹内悦子

窪みある備前の壺の九蓋草  
どの道を歩いてゆくも猫じやらし  
人も神も濡らしてゆきぬあばれ梅雨  
蟬の来て公園の木々啼き出しぬ  
近づいてまた遠ざかる日雷

大島翠木

大向日葵天細女命かな  
青龍の虹の消えたる横川かな  
色鯉やお不動様の地獄絵図  
四葩へと僧の黄衣のまぎれけり  
雉の尾へ貫く青や秋立ちぬ

雨村敏子

耳奥に青水無月の水音する  
奥殿へ向かふ私と道をしへ  
熊楠の森の滴り聞いてをる  
鋤鍬や芋殻焚く火の向かう側  
早星流沙ながるる音聞こゆ

小形さとる

摘みたての大葉匂へり西行歌  
御陵の上に波ある昼寝覚め  
まじ吹くや人の面おもてに十二宮  
玫瑰や右に左に海がある  
奈良坂の風すじ見えて甜瓜

本多俊子

星の渦蓮の浮葉となりにけり  
夏の犀鎧まとふは寂しきか  
炎天に棒一本の日影かな  
上布といふたましひに腕通す  
秘めし恋とも天蚕のうすみどり

久津見風牛

長老の横たはりたる漆彩うるしいろ絵  
猛暑なる使ひ道なき荷を背負ふ  
さりげなく鯨の腹に昼寝せり  
山姥のしどけなき寝や田水沸く  
入道雲筋書きありて雷鳴す

近藤 きくえ

走り根の踏まれても延ぶ青葉闇  
夏霧や叡山法灯朱あかと  
持ちおもりして丹波路の小判草  
沢蟹を追ふ子の眼らんらんと  
沼神の在すとでんと墓

近藤 喜子

生きてゐるものに重たき晩夏光  
分身のこと空蟬の祈りをる  
玉蟲や刻かけ帰りきたるもの  
涼風や我が身すつぼり湖となる  
パンドラの箱に残りしもの虹は

谷村 幸子

空の青精いつぱいの立葵  
時々の風鈴ききて写経かな  
池ひとつ浮きては沈む蝶蝸ゐて  
撫子のゆれて摩耶山天上寺  
筆づかいに佳き句光りて夏すずし

瀬川 公馨

頓狂な天下無敵の郭公  
がつがつと土を喰らひし梅雨の鬼  
半世紀田舎ぐらしやかき水  
夜蛙のやんやの喝采ありにけり  
駒鳥の三国一のベルカント

久保東海司

山窪や永久に汲むべき泉あり  
湯ぼてりに歪むゆかたの流し文字  
父母に逢ふ墓の両脇百合匂ふ  
人混みを分けて歩める日傘かな  
暗黒の伽藍を覆ふ天の川

松原仲子

こと足りて愁眉を開く蓮の花  
三伏や時持て余す無言劇  
炎ゆる日に靄りて曲がる大河かな  
つれづれに風やりすごす夏の果て  
蟬時雨それも幼き日暮かな





# 槐市集

中田禎子

蜘蛛の巣の主は留守よ通り雨  
子に見せるルーペの中の天道虫  
蟻の乗る笹舟渦の真中かな  
向日葵やしつかり者の妹よ  
カーテンの開かぬ窓やカンナ燃ゆ

中野京子

毎日の鼓動を色に青葉風  
打ち返す玉を目据えり雲の峰  
向日葵の空に気づきし腹時計  
記憶とは何処へでてゆくラムネ玉  
デジカメで拾ふ空也の声涼し

中道愛子

萱草の花やはるかに八ヶ岳  
七月や昼でもくらきテイルーム  
百合活けて微笑む夫の遣影かな  
さつそうと歩く少女の夏帽子  
目高飼ふ少年の目の生き生きと

西村純太

宮仕へ終へて穀象風に這ふ  
雲の峰崩るときのエホバかな  
しののめの浩二先生薔薇を食む  
黒谷へ夏花を負ひてゆきにけり  
端居して反故となりたる句を拾ふ



# 槐集

## 高橋将夫選

紫陽花や秘色の光<sup>ク</sup>の弥勒佛 東京 西村 純太

この世にもあの世にも咲く優曇華よ  
雲の峰崩して鵬は南冥へ

形代の抜き手で去りぬこの世から

汝と私のルビンの壺や雲の峰

恐竜は滅び筍流しかな 守口 柳川 晋

五芒星を描いた日から水馬

弥生系縄文系と更衣

天邪鬼ほとけの蹄にて午睡

明易や籠目を抜けて鬼<sup>かみ</sup>となり

炎帝へ一礼二礼大鴉 岩下 芳子

骨格の鯨一体涼しかり

歴日のココナツツミルク夏の海

其の上の三四郎池に泳ぎたる

滝見茶屋の赤前垂れのアルバイト

胸の内に置むものあり更衣 枚方 富松 寛子

わが野性くすぐる茅花流しかな  
十葉の籬に寄する波頭

花芭蕉ちようどよき風余生にも

壺焼のひとつは眠りひとつ開く

日輪をもぎとる朝のトマトかな 中野 京子

一輪を生けてもてなす夏座敷

くりかへす大波小波の素足かな

白玉や未来は今に今は過去

方円の器になじむ代田水

晴れの日の向日葵なべてこちら向く 谷岡 尚美

草いきれむんむん満つる露の世に

蜘蛛の糸一すぢ光る五葉松

纏れては小橋をくぐる螢かな

夕顔のきのふと同じ花の数

# 銀河往来 高橋将夫

◇「槐集」 観照

汝と我のルビンの壺や雲の峰 西村 純太  
「ルビンの壺」は中央に白の壺があり、左右の黒の部分が人の横顔に見えるような図形。雲の峰の左右の青空が汝と私の横顔とはまた壮大な図形。どうやら、汝と私の間には雲の峰のような大きな障害があるようだ。へ雲の峰崩して鵬は南冥へ 純太もまた、壮大な虚。

恐竜は滅び 筒流しかな 柳川 晋  
隕石が衝突して地球は粉塵に覆われ、恐竜は絶滅した。太陽の光が戻った地上には、恐竜に替わって人類が繁栄しているが、筒流しのそよぐ自然を大切にしたいものだ。

骨格の鯨 一体 涼しかり 岩下 芳子  
鯨の骨が涼しげに展示されているのだが、「骨格の鯨一体」で大きな鯨の姿がリアルに想像され、迫力が感じられる。「涼しかり」がよく利いている。

壺焼の一つは眠りひとつ開く 富松 寛子  
壺焼が二つあるだけの景だが、なんとも不思議な雰囲気のある一句。壺焼の一つは眠ったように蓋を閉じ、もう一つは蓋が開いている。単なる写生を超えた何かがありそう。

方円の器になじむ 代田水 中野 京子  
方円は正方形と円。水は方円の器に随うというが、どうやら

代田の水は長方形の器になじんんでいるようだ。それにしても、代田の水を見て、方円の器を連想するとは恐れ入りました。

蜘蛛の糸一すぢ光る 五葉松 谷岡 尚美  
一筋の蜘蛛の糸の光が印象的。リアルな写生。へくもの糸一すぢよぎる百合の前」という、写生派の高野素十の句を思い出した。

空蟬に厳しき顔のありにけり 岩月優美子  
もはや魂の抜け去った空蟬だが、地中を出て羽化の場所にまでたどりついた穴蟬の必死の思いがそのまま顔に残っているという。作者はその顔に生きる厳しさを見ているのだ。

蟬からを脱ぎてより知る宇宙かな 近藤 公子  
蟬が殻を抜けて大空へ飛んでゆく。なるほど、蟬は飛びながら宇宙を実感していることであろう。

蜘蛛の囲やからめ取られし人生よ 前田美恵子  
蜘蛛の巣がよもや人生までも絡め取るとは思わなかった。もともと、作者の人生は決して絡め取られていないが。

狭めたる娑婆の窓より天の川 中田 禎子  
少し開いた窓から天の川を見ているだけの景だが、娑婆と言われて、がぜん天の川が清らかに輝いてきた。

青葉嶺より新しき風生まれ出づ 近藤 紀子  
爽やかな一語。青葉嶺からの新しき風の行方を大いに期待したいところ。(以下略)